

お詫びと訂正

「大原美術館所蔵 名画への旅—虎次郎の夢」展図録（2026年1月3日発行）におきまして誤りがございました。
ご迷惑をおかけいたしましたことを深くお詫び申し上げますと同時に、ここに、訂正をいたします。

ページ	箇所	内容
P.6	謝辞追加	井田太郎（近畿大学文学部教授）
P.23	上から26行目	【誤】 従 【正】 徒
P.32		【誤】 OTTOMAN 【正】 OTTMAN
P.42	解説文差し替え	戒橋の東隣に「太左衛門橋」という木造の橋がある。江戸時代にこの橋の近くで歌舞伎小屋を開設した名題役者・大坂太左衛門（生没年不詳）にちなんで名づけられた通り、古くからこの界限はいくつもの芝居小屋でにぎわったが、いまやその面影は影を潜めたと言ってよい。とはいえ、虎次郎が本作を描いた頃は、いまだその雰囲気は濃厚で、いくつもの赤い幟が掲げられていることから、昼夜さまざまな演目が行われていたのだろう。通常、名題役者ともなると舟に乗ってやって来る。橋の上から川を眺めている人々は、その到着をいまかいまかと待ちかまえているのだろうか、ゆえに橋の下には有料公衆便所（緑色の小屋）がつくられたのかどうか。赤、緑、黄といった原色を散りばめることで、濃密な賑わいを表現した興味深い一作である。（K. A.）
P.44	解説文差し替え	本作は《道頓堀》（出品番号11）と同日に描かれたと考えられる。戒橋から西に場所を移し、住吉橋が描かれている。橋の向こうに見える大きなレンガ造りの建物は、いまはなき道頓堀変電所である。江戸末期の商家との対比が印象的だが、同じく住吉橋も近代的な長いポールの街灯を持つ鉄橋である。橋を行き交う人々は足を止め、川を行き来する船を眺めているのだろうか。赤い自転車を止めて眺めている人もいる。川の流れのような時の移ろいの中で、その瞬間瞬間を楽しんでいる虎次郎の様子をつい想像してしまう。（K. A.）
P.71	上から7行目	【誤】 独創 【正】 独奏
P.66	解説文上から1行目	【誤】 私事 【正】 師事
P.74	作者	【誤】 フェルディナン・ホドラー 【正】 フェルディナント・ホドラー
P.78	作品タイトル	【誤】 Annuciation 【正】 Annunciation
P.80	パブロ・ピカソ 作品素材	【誤】 油彩・カンヴァス 【正】 油彩・板 【誤】 Oil on canvas 【正】 Oil on panel
P.92	画像の差し替え	【誤】 （左） 埃及帝王王朝三千年之遺跡 【正】 （左） 金字塔 埃及王朝五千年之遺跡 【誤】 （右） 金字塔 埃及王朝五千年之遺跡 【正】 （右） 埃及帝王王朝三千年之遺跡
P.106	作品タイトル	【誤】 Rodenst 【正】 Rondest
P.126	作品タイトル	【誤】 Overshie 【正】 Overschie
P.146	作者	【誤】 OTTOMAN 【正】 OTTMAN
P.148	作者	【誤】 フェルディナン・ホドラー 【正】 フェルディナント・ホドラー
	作品タイトル	【誤】 Annuciation 【正】 Annunciation
	パブロ・ピカソ 作品素材	【誤】 油彩・カンヴァス 【正】 油彩・板 【誤】 Oil on canvas 【正】 Oil on panel
P.150	作品タイトル	【誤】 Rodenst 【正】 Rondest
P.151	作品タイトル	【誤】 Overshie 【正】 Overschie